

お見合いから、十日ほど経った日のことでした。初めてのデートのお誘いです。当時は、ダンスホールに代わってボウリング場が若いカップルの人気スポットになりつつある時期でした。スポーツマンタイプの彼には、さっそうとボウルを投げる方が、似合っているように思えました。心が躍らずにはいられません。

「じゃ、堤防の水門の脇で」

「えっ、堤防？水門？」

ポカんとあっけにとられた私の顔の前には、それ以上に怪訝そうな彼の表情がありました。

『そういえば、この人、競艇部のエースだったんだ』

女友達が「新聞にも時々載る有名人だよ」と言っていたのを思い出しま

した。なんとなく納得できそうな自分と、戸惑いを隠しきれないもう一人の自分がいたのを今でもよく覚えています。

約束の日の記憶と言えば――。

白い綿毛の坊主頭のタンポポで覆われた土手。夕暮れ時の誰もいない河原。その延々と延びた堤防の上をただ歩くだけの二人。それに――

『傍目にはロマンティックなカップルに見えるかなあ』  
なんて考えていた私――



実はこのころ私には、ひそかに思いを寄せている男性がいました。

この方は野球部の選手で、競艇部のお見合い相手と所属は違うものの、同じ親会社の社員でした。実業団スポーツが盛んな時期でしたから、とも